

<図書紹介>

『世界とつながる科学教育 高校生サイエンスフェアを通して理系グローバル人材を育てる』
田中博編著 2022年 学文社

立命館大学大学院教職研究科2年次生 大垣 椋

グローバル人材という言葉を知ると、英語が話せる人、国際学部、留学に行くといったイメージがあるのではないだろうか。日本の高等教育においては一般的に「理系」と「文系」に分けられ、とりわけ、上で述べたイメージは「文系」に区分されるのではないだろうか。しかし、これからの社会には英語を話せることを前提とした新たな価値やコンテンツを創造していくような理系人材が必要である。そもそも、グローバル人材とは、多様なバックグラウンドを持つ相手に自分の考えを伝え、文化的・歴史的な背景に由来する価値観の差異を乗り越え、相手の立場を理解し、新たな価値を創造できる存在である。

日本の経済界、産業界ではグローバルに活躍できる人材、グローバル市場で競争に勝つことのできる人材が不足していることが指摘され、企業や大学においてそういった人材育成を推進することの必要性が主張されている。本書は、この主張に対して、その当事者である生徒・学生自身の成長や自己実現の視点が欠けていることを指摘し、より主体性や当事者意識を持った取り組みとして日本で2002年から始まったSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業を全7章にわたって携わった教員が実践例を挙げ、分析する内容となっている。

1章では、SSH事業のはじまりと科学教育の変化について触れ、高校生が自身の課題研究を英語でプレゼンする立命館高校でのサイエンスフェアの取り組みについて紹介している。ここでは、課題研究を発表することの重要性、日本の高校生にとっての英語のハードルの高さについて指摘している。2章では、グローバル人材を育てる重要な視点として「多文化共修」を挙げている。多文化共修と

は、文化的に背景の異なる仲間と協働を通じて学ぶことである。3章では、サイエンスフェアを行う上で、日本の「英語教育」の改革を20年の変遷から述べられている。自身の課題研究を英語で発表し、また質疑応答できることは自信につながり、サイエンスフェアを行う大きな意義であるとしている。4章では、ポストコロナ時代のオンラインを活用した情報教育としてのサイエンスフェア、5章では理科教育の現状から課題研究の実践について紹介されている。

6章では、サイエンスフェアを運営する上での工夫、7章では国際科学教育の展望について述べられている。

本書を通して、新しい価値を想像するためには当事者性を持った学びが大切だと改めて認識することができた。国際教育は、学校や教員によって意識や熱量に差があるのではないか。改めて教員一人ひとりが当事者意識を持つことから始まるのではないだろうか。本書の実践のような海外へ行くことは難しい学校もあるだろう。しかし、本書で触れられていたような、多文化共修の考えやオンラインの活用は海外に行かなくとも当事者性を発揮し、発展させることはできるのではないかと感じた。グローバル人材育成の可能性、多様性を考えるきっかけとなる一冊となっている。

